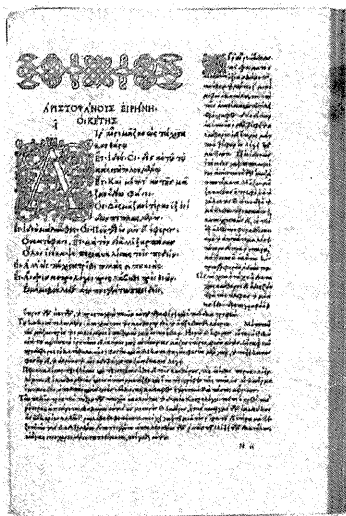


西洋古典の初期刊本をめぐって

細 井 敦 子

成蹊大学図書館所蔵の洋書の中では刊行年が最も古い本をとりあげて、手写本から印刷本への、西洋古典作品の伝承の1例を紹介する。問題の書物は、古代ギリシアの喜劇作者アリストファネス（Aristophanes 紀元前 5~4 世紀）の作品集初版本、ヴェネツィアで刊行された（1498 年 7 月 15 日付）。Incunabula「揺籃期本」と総称される本の一つ。印刷刊行者は、数多くのギリシア古典を刊行してイタリア・ルネッサンス文化を支えた、ローマ近郊出身の Aldo Manuzio（1450 頃~1515）[以下、アルド]。かれに協力して収録作品本文註の校訂編纂をしたのは、当時ヴェネツィアの支配下にあったギリシア・クレタ島出身の学者 Markos Mousouros（1470 頃~1517）[以下、ムスウロス]。ラテン語書名は Aristophanis Comoediae Novem『アリストファネス喜劇 9 作品集』。



f.N2r「平和」冒頭。飾り頭文字は木版
『成蹊大学図書館蔵稀書解説目録』（2006年9月）より

1. この本の体裁：判型はフォリオ判。本文の言語は古代ギリシア語韻文（標題、序文などにラテン語も使用）。やや大きい活字で印刷された部分が本文で、それを鉤の手に囲む部分が注釈である。この本にはアリストファネスの喜劇 9 作品（「福の神」「雲」「蛙」「騎士」「アカルナイの人々」「蜂」「鳥」「平和」「女の議会」）がこの順で収録され、各作品に先立って古代から中世の学者たちによる韻律論や作品梗概、登場人物一覧などがおかれている。この本は計 44 折丁、347 紙葉で構成されていて、1 折丁の基本は 4 枚綴 8 紙葉であるが、2 枚、3 枚、5 枚綴の折丁もある。これは各作品が必ず新しい折丁で始まるようにな

っているためで（第一作品は少し不規則）、原稿がすべてそろってから印刷にかかるのではなく、折丁単位、作品単位で割付や印刷がなされていたことを示すと考えられる。一般に、当時の本は印刷した紙を疊んで重ねただけで製本はしないで出荷されていたので、製本時における乱丁落丁を防ぐために、アルドは巻末に折丁ごとの「始語一覧」と「折記号一覧」を付すという二重のチェック方式を採用した。自分が入手したアリストファネスを、一つのまとまりとして最良の形で世に出そうという意欲の表れであろう。

II. アリストファネス作品の伝承と初版本：アルドが入手したアリストファネス、つまり印刷の原稿としての写本と刊本成立の経緯との概略は、アルドによる序文とムスウロスによる編纂者付記 (f.M4v) とを併せて推定できる。これらの当初の計画では「福の神」から「鳥」までの7作品を収める予定で準備完了していたが、そこへあらたに「平和」、「女の議会」、「女の平和」の3作品の写本が手に入った、しかし「女の平和」は写本の状態が悪くて印刷の原稿とすることができず、けっきょく9作品集として刊行したのである[「女の平和」は「女だけの祭」とともに1516年にフィレンツェで初版が出た。これら11作品が、現在まで伝えられたアリストファネス全作品である]。それではアルドとムスウロスとはどの写本を作品本文や注釈の「原稿」としたのか、現在残っているアリストファネス写本の中に該当する写本があるのか。

アリストファネスの喜劇は、作者の時代には鋭い政治諷刺を基盤とする奇想天外な構想によって人気を博したが、ヘレニズム時代以降は、上演のための劇作品としてよりも、古典文化の中心地であった都アテネで話されていた、純正かつ「生きた」ギリシア語とその社会を伝える言葉として、語彙・語法や韻律の研究対象として生き残った。前期ビザンツ時代の盛時10世紀中頃に首都コンスタンチノーブルで制作された「ラヴェンナ本 (R 写本)」とよばれる註釈付きの写本には現存する11作品すべてが手写されていて、アリストファネス写本ではこれが最古最良であるが、今問題のアルドはこの写本は使っていない。後期ビザンツ時代14世紀以降の写本はかなり現存するが、その中には当時の学者とくに Triklinios による校訂や改変を受継いだ写本も多く、アルド刊本にはその影響も指摘されている。写本伝承の研究では、複数の写本間に見出される共通誤写の検証を基本とする本文批判がなされ、筆写者の同定、料紙の年代決定、写本所有者の変遷等をたよりに写本間の親疎関係と位置づけを定める試みがなされている。しかし、伝承過程で起こる改竄や修正、テキストの読みが写本間で混流する現象に加えて、アリストファネスでは残っている写本の数

も作品ごとに大きく異り、註付きの写本もそうでないものもある。写本伝承自体の系統を明瞭にすることが困難である上に、刊本になると印刷工のミスや編纂者による修正も加わって、刊本のモデル（作品本文および註釈の原稿）探しは容易ではない。ある程度の目安として、アルド版テキスト（f. Π 2v）にある大きな欠落（「平和」947～1011行）と同じ欠落が現存のΓ写本とB写本とに見られる場合、原稿はこれらの写本と同系統のものであろうと推定される。あるいは、14世紀後半に作られたE写本の見返し紙に「マルコ・ムスロ」という所有者名があり、一方E写本とアルド刊本との読みを比較して近縁関係が見られるので、これも原稿作成に寄与していることが推定される。また、写本の一部分が発見されてそこにアルド自身の手によるフォリオ付の記入があり、その料紙の透し文様から年代と制作地が推定でき、筆写者（アルドの同業者でムッスウロスの同郷人）も同定できて、それ（S写本）が当該作品のプレスコピーの一つだと確定される、などの例を挙げることはできる。

本文を囲む形で印刷された註釈（scholia「古註」）は、概してヘレニズム時代、ローマ時代からのものは歴史や社会の事柄に関する註が多く、中世のものは語彙・文法・韻律に関する註が多いとされる。アリストファネスの喜劇は政治諷刺、社会批判をその本質としているため、特定の人物や事件への暗示や日常生活の実態を理解するには、古註は情報の宝庫として不可欠である（1例：f.E3r「蜂」1035行）。また古註の中に、現存する中世写本の本文とは異なる、しかも本文より良い読みが伝えられていることもある（1例：f.E3v「蜂」1050行）。アルド刊本中でムッスウロスは、このような古註を「いくつかの写本の中に散在し混乱していたものを集めて注意深く修正した」と記している。



III. 現時点からみたこの本の価値：アルドとムッスウロスによるこの初版本は、その後3世紀にわたってアリストファネス刊本の範となった。18世紀末以降、アルドには使われなかった最古最良のラヴェンナ写本を全面的に採入れた校訂版が出され、さらに古代のパピルス断片や近世の写本の発見もあって本文古註伝承の解明が進んだために、20世紀後半以来、このアルド版をそれ以前ほどには高く評価しない見方も出ている。しかし、西欧諸国の連携によって文献学

写本学の成果に基づく系統的な『アリストファネス古註集成』18巻が50年近い年月をかけて刊行される今日（2007年6月完結）、あらためてアルドの初版本の良さが見直されてもいる。編纂者ムッスウロスが、先学の説を批判的に受継ぎながら註釈をしているところ、中世に出された修正とそれに先立つ写本の読みとを組合わせて第三の読みを提案しているところ、現存写本の中にはない良い読みを記しているところも少なからず指摘されており、この意味でもアルド版には、ルネッサンス期の諸写本と同等の評価が与えられてよいであろう。一口に「写本から印刷本へ」というが、15世紀はもちろん16世紀においても、写本と印刷本は並存していた。現に先に挙げたS写本はアルドの同時代の同業者が制作したものであり、また、ムッスウロスが使った写本の一つと推定されるL写本は、一部分が欠けていてその欠けた部分は後からアルド刊本を写して補ってある。ムッスウロス自身が筆写した、異なるジャンルの古典作品の写本も多数現存する。写本と初期刊本との間の流れは双方向的だったのであり、アリストファネス・アルド版の、写本と並ぶ重要な地位は今後も保たれてゆくと考えられる。

付記：今回、準備の打合せや会場や懇親会の席が交流の場となって、私には、洋の東西、古典研究が共通の問題をもっているという印象を得られたことも嬉しかったのですが、同時に、中国古典とギリシア古典とが大きく異と思われる面について多くの示唆をいただいたのはたいそう有難いことでした。喜劇というジャンルが文化伝承において占める位置のちがい、写本と刊本とが双方向的に共存していたルネッサンス期の状況と中国古典の状況、「官」の刊本と「民」の写本という分け方は可能かどうか、ギリシアの古典が2千年後に異国人との共同作業で初めて活字になった西洋と、それより遥か以前から自国の古典を自国で印行していた中国と・・・等々。このような機会を与えて下さった中国文化学会の皆様に、あらためて厚くお礼申しあげます。（2008年3月・細井）

（成蹊大学）